

## 特別な支援を必要とする学生の修学支援の現状と課題（3）

### －教育・保育職養成を多様性の視点から考える－

企画者	小柳津和博（桜花学園大学）	・ 勝浦 眞仁（桜花学園大学）
司会者	柏倉 秀克（桜花学園大学）	
話題提供者	小柳津和博（桜花学園大学）	・ 勝浦 眞仁（桜花学園大学）
	堀 由里（桜花学園大学）	・ 柏倉 秀克（桜花学園大学）
指定討論者	生川 友恒（静岡大学）	

KEY WORDS: 障害学生支援、教育・保育職養成、多様性

#### 【企画趣旨】

高等教育機関に在籍する障害学生は3万人を超え、今後一層の増加が予想されている。障害者差別解消法が施行され5年目を迎えるが、高等教育機関における障害学生支援は必ずしも円滑に進んでいない。とりわけ教育職や保育職といった対人専門職養成に重点を置く大学等では修学支援に困難を抱えるケースが数多く報告されている（日本学生支援機構 2021）。このシンポジウムでは教育職や保育職を養成する大学等において課題となっている事例を報告し、対人専門職養成における修学支援について、多様性の視点から議論を深めることを目的とする。

#### 【話題提供者の趣旨】

##### 話題提供 1：学内実習での学生による相互支援の事例

小柳津 和博（桜花学園大学）

教育・保育職を養成する大学等において、実習での学びは必要不可欠である。特別な支援を必要とする学生は、学外実習において普通の学修のように教員や友人の協力を得る機会はもちろん、大きな不安を抱えている。2020 年度、感染症予防対策として学内での代替実習を実施した際、特別な配慮を必要とする学生に対して支援を行った。教員による支援を基にして、特別な配慮を必要とする学生を含む学生同士で相互にサポートしあう体制構築の芽生えがあった事例を報告する。特別な配慮を必要とする学生が、他の学生が得るものと同じ質の学修機会を保障する必要があることから、教育・保育職養成大学の実習における、学生同士の相互支援の在り方について考察することを試みる。

##### 話題提供 2：保育の熟達者は多様な学生たちをどのように受け止めているのか

勝浦 眞仁（桜花学園大学）

専門職一般にもいえることではあるが、保育職にある者は、一定水準の知見を有するとともに、その職に求められる資質を備えた人物であることが求められている。学生たちはその目標となる保育者としてのあり方に近づくべく、養成機関におけるカリキュラムや実習等を履修していく。一方で、多様な学生が保育者養成校に入学してくる中で、現状の養成課程では取り残されてしまう学生が一定数存在するようになってきた。特に社会人として必要とされる資質の面で心配な学生が多くなってきているように感じられる。そういった学生たちを保育の実務経験があり、現在、教員である熟達者たちはどのように受け止めているのだろうか。本発表では、保育の熟達者が在籍する実習センターの教員を対象としたインタビューを行い、高等教育機関に多様な学生がいる意味に迫っていきたい。

##### 話題提供 3：保育現場での同僚性を活かす多様性理解

堀 由里（桜花学園大学）

保育・幼児教育の現場では、近年職務内容がますます広

がり多忙を極めている。そして、保育者の個別対応にはもはや限界があり、保育者同士の支え合いや協働的に機能し合う同僚性が重要視されている。同僚性が十分発揮されるには、保育者同士の相互理解が必要不可欠であるが、保育者間においては多様性を認めにくい文化が存在する。保育の対象となる子どもたちに対しては障害や外国籍など多様性を理解し配慮が進められているが、働き手である保育者自身は、気働きができることが大前提となり、それが難しい同僚に対する理解が追い付いていないと考えられる。そこで、同僚に対する理解の程度や多様性を認めていく過程について保育者を対象としたインタビューを行い、同僚性をうまく機能させるためのポイントを明らかにしていく。

##### 話題提供 4：日本学生支援機構が収集した事例から

柏倉 秀克（桜花学園大学）

日本学生支援機構は、障害者差別解消法の下での紛争の防止・解決に関し、各大学等が適切な対応を行なうための具体例を収集・分析・公表・普及することを目的に、障害者差別解消法に関する対応状況調査、紛争の防止・解決等の参考となる事例を収集している。話題提供者は「障害学生に関する紛争の防止・解決等事例集協力者会議」の一員として紛争事例を収集するとともに、その分析を進めてきた。これらの事例の中から、保育職や教育職を養成する高等教育機関において特徴的な事例を取り上げ、当該大学名や部局が特定されないよう配慮した上で報告する。保育職や教育職養成については学外実習における配慮が重要な課題となっており、報告ではこうした事例を中心に取り上げ、シンポジウムにおける議論の材料としたい。

#### 【指定討論者の趣旨】

##### 教育・保育職養成の実習における配慮

生川 友恒（静岡大学）

教育・保育職養成の集大成である実習は、専門職として働くうえで必要な資質を身に付けていることを確認できる場であるが、障害のある学生にとっては、社会的障壁が多く、つまりきやすい場ともいえる。質の高い指導案を準備することだけではなく、子ども達や利用者との臨機応変な対応が実習生には求められる。実習生の受入機関も合理的配慮が法的義務になるが、多忙な現場は1から10まで実習生を指導することは難しい。実習開始前に、養成校の指導教員と実習先の指導者が学生本人を交えながら話し合いをおこない、あらかじめ障害特性を共有し、どの範囲まで情報開示するかなどを決めておく必要がある。そうした課題に配慮し、実習時の社会的障壁を減らした好事例を蓄積していくことは、障害のある学生の実習参加の幅が広がり、多様性のある専門職同士の協働につながっていくと考える。（OYAIZU Kazuhiro, KATSUURA Mahito, HORI Yuri, KASHIWAKURA Hidekatsu, NARUKAWA Tomotsune）